

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 藤井 淳

空海(774-835)は日本仏教史上の巨人であり、その名はよく知られているが、その思想がどのようなものであり、思想史上にどう位置づけられるかについては、批判に耐える研究はほとんどない。確かに真言宗内部での研究は盛んであるが、多くは既存の教学を前提とした宗派的な立場からするものであり、必ずしも宗派外で通用するものとはいえない。その中であって、本論文は空海を当時の日本の思想状況や中国思想の影響を考慮に入れて考察し、空海自身の思想展開をも含めて、その思想史的な位置づけを明らかにした。

本論文は三編からなる。第一編では、空海の伝記と著作を扱っているが、その中で、空海を簡単に密教僧と言ってしまうことに疑問を呈し、当時の三論宗と法相宗の論争を考えると、空海はもともと三論宗の僧として出発しているという説を提出し、論証している。また、その著作についても、一部の著作に偽作の可能性が高いこと、従来後期の著作と考えられてきた『即身成仏義』などが、比較的初期のものだと推定されることなど、新説を提示し、説得力のある論証を行なっている。

第二編では、これまで空海独自と考えられてきた顕・密、法身説法、阿字不生などの密教的と言われる主要な概念・思想について、じつは中国に先行するものがあり、しかも必ずしも密教的とはいえないことを、多くの文献を精査して論証した。とりわけ欧陽建の『言尽意論』との関係に注目して、従来の仏教が「真理は言語で表現できない」と考えるのに対して、空海は「真理は言語で表現できる」と主張したところに、その思想史的意義を見出している。これは、空海の思想を狭い仏教的な枠を外して、普遍的な思想・哲学として見直すためにもきわめて重要な基礎作業といえる。

第三編では、空海の主著とされる『秘密曼荼羅十住心論』を取り上げ、空海独自とされる十住心(十段階の精神発展段階)について検討を加える。十住心は心の発展段階であると同時に、当時の仏教界の諸宗を評価し、序列化するという教判としての意味を持つ。本論文は、その中での法相宗・三論宗・天台宗・華嚴宗の位置づけを、空海の他の著作と比較しながら、最終的に空海の到達した思想を解明している。

以上のように、本論文は従来の空海研究を批判しながら、広い思想史的視座から見直し、その思想的確な位置づけを図ったものであり、多くの新知見に満ち、しかも、多数の文献を渉猟して、それを論証している。やや一面的に自説を主張しすぎている点、空海の新密教的側面を強調するあまり、その密教について十分に位置づけられていない点など、問題点は残るが、その大きな成果に鑑み、博士(文学)の学位を与えるのにふさわしいものと判断する。